

## 編集後記

本事業「『古事記』の学際的・国際的研究」は、巻頭の「発刊の辞」にもあるように、國學院大學の「二十一世紀研究教育計画（第三次）」で提起された、「日本文化の国際的理解に向けた研究（国際日本学）の推進」を具現化する研究事業として発足した。そして、ここに『古事記学』第一号として、平成二十五年後期から本年度までの研究成果をまとめる運びとなった。

本事業は、Ⅰ『古事記』の本文校訂・訓読・現代語訳とⅡ『古事記』解釈史・研究史の研究からなる。Ⅰについては、國學院の『古事記』『日本書紀』研究の蓄積を基礎として、今日の諸研究を、本文に即した解釈の視点から再検討しつつ、それらを踏まえた新しい解釈と現代語訳を提示する。Ⅱについては、国学史、歴史学、民俗学、神話学、考古学的人文諸学の観点から『古事記』の現代的理解についての検討を進めるものである。

本号に掲載された論考も、これら研究成果の一部である。これら各グループ

の研究成果は定例研究会で発表されたものもひとつとなり、平成二十五年度には三回、平成二十六年には五回、研究会を開催してきた（詳細については『研究開発推進センター研究紀要』第九号の彙報を参照）。研究会はグループⅠによる『古事記』本文の注釈とグループⅡによる研究発表で構成される。また、グループⅡの研究発表は、神話学や考古学などの知見から考察が行われ、まさに多角的に『古事記』を捉えた学際的研究会が開催されている。これら研究会において取り上げられた問題点や、提示される多くの研究情報は、その都度、共有化がはかられ注釈活動に反映させる努力がなされている。

また本号に掲載された講演録は、平成二十六年十月二十五日（土）に、文学部との共催のもとに開かれた「『古事記』の学際的・国際的研究」講演会のものである。会場の國學院大學学術メディアセンター常磐松ホールには、一六〇名を超える聴講があり、一般の方々の『古事記』に対する関心の高まりを実感させられる会でもあった。講師には、鈴木正崇氏（慶應義塾大学教

授）と毛利正守氏（皇學館大学教授・大阪市立大学名誉教授・古事記学会代表理事）をむかえ、長時間にわたる講演をいただいた。それぞれのご講演からは、国書である『古事記』に多様な観点が内在していることを示して頂き、今後の『古事記』研究にとって一つの指標となるものであった。その講演録を本号に掲載できたことも、大変有り難く喜ばしいことである。

國學院大學では皇典講究所の創立以来、神道・日本文化の根幹に関わる古典についての研究が継続して行われてきた。『古事記』については、伝統的な国学の総合性のもと、さまざまな分野からの研究がなされてきた歴史がある。しかしながら、近年においては人文学の専門分化に伴って『古事記』研究も精緻化が進む一方、分野を越えた研究の全体像はやや見えにくくなっていくといえる。そういった意味でも、本事業では『古事記』を今日の研究状況に即した、多方面から研究すること、新たな時代の「古事記学」が構築されていくことを切に望むものである。（渡邊卓）